研究報告

初期日系アメリカ文学の再考
―民衆詩派との交流に着目して―

水野真理子

This paper describes Japanese American literature with a special focus on its connection with folk poetry, and explores future research directions. The digitization of Japanese language newspapers has made it easier for researchers to investigate newspaper materials and enable researchers to describe Japanese American literary history beyond the scope of specific writers or places. With the current digital materials, it is possible to clarify the connection among writers and their course of movement. In the process of researching the materials, it was found that after returning to Japan, some Japanese immigrant literature writers living in America during the 1910s had a significant connection with folk poets. This paper summarizes the relationship among the writers, considering the literature of Whitman and Trobel as their junctions, and the literary activities of Yonejiro Noguchi. Through this summary, I take a first step towards clarifying a major literary movement in which three aspects of literature – Japanese American literature, Japanese literature, and American literature – are intertwined.

１．はじめに

俳句、詩、短歌、小説など文学作品は、人類の歴史の流れにおいて、その時代を反映し、特定の場所や環境における人々やコミュニティの暮らし、生き方、心情、思想などを映し出してきた。それは日系アメリカ文学に関しても当てはまることであり、日系アメリカ文学の作品群および作家たちの活動は、日系アメリカ人の歴史、それと同時に日本とアメリカの複雑な歴史的関係を反映してきた。筆者は、こうした観点のもとに、日系アメリカ人、ならびに日本とアメリカとの文化的、社会的関係を、文学活動を通じて考察してきたが、近年、資料のデジタル化の動きに準じて、日系アメリカ文学の歴

史の再考を進めているところである。そのデジタル化の一例としては、スタンフォード大学フーヴァー研究所所蔵の邦字新聞デジタルコレクションがある。1880 年代から始まる日系アメリカ文学は、作品の発表を行う主要な場が邦字新聞であったということから、邦字新聞の調査が必須である。新聞資料のデジタル化によって、調査すべき大量の紙面をパソコン上で容易に閲覧することが可能となり、研究の利便性が格段に高まっている。これまでの日系アメリカ文学の研究では、着目される地域、メディア、文芸人が限定的になる傾向があり、地域間のつながり、連続性などが見えにくいという弱点があったが、邦字新聞のデジタル化により、新聞に投稿される数多くの記事を手掛かりとすれば、文芸人同士のつながりや文芸人たちの移動について、以前よりもその詳細を明らかにすることができると考えている。それによって、局所的ではなく、全体的な文学地図の描写を目指しているところである[1]。

西海岸を中心とした在米日本人の文学活動において重要な動きは、1915 年頃からのサンフランシスコ周辺における『日米』を中心とした文学活動である。そこではシアトルから南下した翁久允、また『日米』編集者の山中曲江、そして 1915 年以前から『日米』に作品を積極的に投稿していた長沼重隆、明石順三などの在米日本人作家たちが、『日米』の紙面を中心に合流し、こうした文芸に関心のある者たちが結集したことで、1915 年から 1917 年にかけての移民地文芸論が発生するにいたった。そうした移民地文芸論を主軸とする文学活動に関わっていた文芸人たちは、おおよそ 1918 年以降、それぞれの将来の決断や新たな進路に応じて、サンフランシスコを離れたり、日本に帰国したりなど、各自の道を辿っていく。こうした彼らの活動の軌跡に焦点を当てて、邦字新聞の記事を調査していく過程で、彼らが在米時代および日本帰国後、日本文壇で活躍していた民衆詩派と称される詩人たちと顕著なつながりを持っていたことがわかった。在米日本人の文学活動と日本の文学の動きとの関わりは、シアトルを拠点に活躍した文学青年たちへの自然主義文学の影響、アメリカにおける書店、古書店の流通の観点、また永井荷風、有島武郎、田村松魚など日本で作家としての地位を確立した上でアメリカを訪れた洋行体験としての文学作品という側面から考察されてきた。その中で、在米日本人の作家たちと民衆詩派との関わりについては、ほとんど論じられてこなかった。民衆詩派あるいは民衆派詩人というのは、福田正夫を中心に白鳥省吾、富田砕花ら詩雑誌『民衆』に集まった詩人たちのことを一般的に指している。その『民衆』には長沼重隆の作品が、そして福田が 1926（大正 15）年に創刊した雑誌『主観』にも長沼や清水暉吉（筆名―夏晨）が、多数の作品を寄せている。清水は文学好きな青年で、『日米』連載の翁の長編『悪の日影』に感銘を受け、その感想を『日米』に寄せた他、詩などを精力的に創作していた。

加えて日本とアメリカの文学的交流として重要な事項がある。それは、民衆詩派の詩人たちと在米日本人作家たちを結び付けたものは、アメリカの詩人ウォルト・ホイットマン（Walt Whitman, 1819-

[1] 水野真理子「日系日本語文学におけるトランス・ボーダー性―移民地文芸の探求において」山本秀行他編著『アジア系トランス・ボーダー文学―アジア系アメリカ文学研究の新地平』（小鳥遊書房、2021）、45-58; 水野真理子「初期日系アメリカ文学の再考―邦字新聞デジタルコレクションを活用して」『富山大学教養教育院紀要』第 3 号（2022 年 3 月）、1-21 を参照されたい。

1892）の文学、およびホイットマンの研究者でもあった作家・詩人のホレス・トローベル（Horace Traubel, 1858-1919）[2]であったということである。後述するが、福田ら民衆詩派の詩人たちと長沼は、『草の葉』（1855）をはじめとするホイットマンの詩およびそこに表現される民主主義という概念に魅了され、ホイットマンに強く影響される形で文学活動を行っている。

さらに注目しておくべき別の事項もある。それは民衆詩派と在米日本人の作家たちとの交流に際し、日米両方で認められた詩人野口米次郎（ヨネ野口）も彼らとの関係性の上で関連している点である。野口は 1893（明治 26）年にサンフランシスコに渡り、翁らよりも十数年早くに、アメリカで文学活動を行っている[3]。野口は詩人ウォーキン・ミラーに師事し、類まれな英語力で英詩を書いて、西海岸の若い詩人たちを中心とした詩雑誌『ラーク』などに発表し、彼の英詩はアメリカの詩壇で話題となった。ジャポニズムの機運にも乗り、詩人、文学者として英米の文壇で注目されたのち、1904（明治 37）年に帰国している。1910 年代に移民地文芸論を熱心に議論していた在米日本人作家たちと、野口が文学活動をともにしていたというわけではないが、彼には 1890 年代の初期在米日本人社会に居住していたという経験があり、野口の活動も日系アメリカ文学の流れにおいて欠くことのできないものである。しかし、翁ら在米日本人作家たちとの帰国後の関わりなどについては、日系アメリカ文学研究の俎上にはこれまで上がってこなかった。

これらの点を踏まえると、民衆詩派とのつながりを鍵として日系アメリカ文学を再考することにより、在米日本人作家たちの活動、民衆詩派とのつながり、ホイットマンやトローベルの文学、日米を股にかけて日英両語で作品を発表した詩人野口の文学という、これまで点として存在してきた要素が、日系アメリカ文学と日本の文壇、およびアメリカの文学の三側面が相互に絡み合う、文学的交流と影響関係の大きな動きとして見えてくるように思われる。本稿ではいまだ不明な点、研究途上の点もあるが、ひとまずは第一段階として、在米日本人作家と民衆詩派との関わりについてその詳細をまとめ、今後の研究の方向性などを示したい。

２．民衆詩派とのつながり―交友関係

各作家たちのつながりや交友関係を明らかにするためには、彼らの年譜を互いに比較してみることが必要であろう。野口が 18 歳から 28 歳の頃、渡米・渡英し、『日本少女の米国日記』（*The American Diary of a Japanese Girl*, 1902）、『東海より』（*From the Eastern Sea*, 1903）を刊行して、詩人として認められていく頃、翁、長沼、福田らは少年期、青年期を送り、それぞれの故郷で勉学に励んでいた。彼ら三名はおおよそ同世代である。1907（明治 40）年に翁が渡米し、シアトルを中心に文学活動を開始した後、一年遅れで 1908（明治 41）年に長沼が渡米して、サンフランシスコ周辺で文学活動を始める。福田の文学活動が本格的に開始するは 1915（大正 4）年以降である。そして福田と長沼が出会い、

[2] 発音表記の仕方により、トラウベルと記載する文献もあるが、ここではトローベルとした。ただし、作品内にトラウベルと記載されている場合は、そのままとした。

[3] 野口の伝記的事項については、堀まどか『「二重国籍」詩人 野口米次郎』（名古屋大学出版会、2012）を参照。

彼らの交流が始まっていく重要な時期も 1915 年以降である。

まず福田の場合から確認してみよう[4]。福田は 1893（明治 26）年 3 月 26 日に神奈川県小田原町に堀川好才の五男として生まれた。1901（明治 34）年に父が亡くなったことから、その後、幾度も他家に預けられ、書生として寄寓するなど苦労を重ねた少年時代だった。寄寓先が変わるたびに学校も転々としているが、1908 年、15 歳のときには高等小田原小学校を卒業し、翌年 4 月には神奈川県師範学校本科に入学している。この頃より同級生たちとともに詩歌を愛好し始めた。1910（明治 43）年には 1907 年からの奇寓先であった小田原町の福田家（福田誠信）の養子となる。その後 1914（大正 3）年の 21 歳までは、師範学校で勉学に励みながら富田砕花、百田宗治（そうじ）、井上康文、花岡謙二ら、後に『民衆』で切磋琢磨する文学仲間たちと出会っている。

そして 1915 年 22 歳以後、詩人としての福田の活動はよりいっそう活発化していく。それと同時期に、在米日本人たちとの交流の接続点となるホイットマン、トローベルの文学に出会うのである。1915 年 1 月、福田は小田原から上京し、九段上に下宿して国民英語学校に通っていた。そして富田砕花の寄寓先である斉田家で白鳥省吾と出会う。この頃、トローベルの著作を知ったという。そして教員として小学校に赴任後、詩作の傍らエマーソン、ホイットマン、トローベル、カーペンターの作品を耽読した。同年 12 月、白鳥と富田に薦められ処女詩集『農民の言葉』（1915）を自費刊行し、詩人として出発する。

トローベルとの関わりに着目すると、1917（大正 6）年 24 歳の頃、福田はトローベルの訳詩に専念し、ニュージャージー州のカムデン[5]に居住するトローベルと文通を始める。トローベルの作品紹介も熱心に行っていった。5 月には『早稲田文学』にトローベルの訳詩を発表、1918（大正 7）年の 1 月には、『新潮』に評論「民衆詩人としてのトラウベル」を発表、詩誌『民衆』も創刊し、12 月には『民衆―トラウベル号』という特集号も刊行した。

次に長沼重隆の場合を見てみよう[6]。長沼は 1890（明治 23）年、父長沼稲置、母キシの四男として東京市神田区で生まれる。生後、母とともに新潟市西蒲原郡に帰り、その後 5 歳で父を、8 歳で母を亡くしている。母が亡くなって以後、祖父に育てられ、1905（明治 38）年 15 歳のとき、三条中学校に転入学する。野球や剣道に夢中になる一方、文学も好み俳句や短歌を創作して、積極的に地元の新聞に投稿した。1907（明治 40）年、三条中学校を卒業するが、将来の進路をどうするか苦悩している。外務省書記生や陸軍士官学校の道を考えるが、借金を抱える家庭環境から何とか抜け出したいとの思いもあり、また渡米を決めていた友人の選択にも影響され、長沼もアメリカ行きを決意する。渡米を思い立つ経緯にいまだ不明な点も多いが、おそらくそこには当時の青年たちの間にみられた渡米熱が関係していることが想像される。祖父も賛同してくれ、1908（明治 41）年上京し、日本力行会に入会

[4] 福田の年譜や伝記的事項については、福田正夫詩の会編『追想・福田正夫―詩と生涯』（冬至書房新社、1980）；福田正夫詩の会編『資料・福田正夫―人間と芸術』（グローバルメディア、1985）を参照。
[5] 発音表記の仕方の違いによって、「キャムデン」と表記している文献もあるが、ここでは「カムデン」とした。
[6] 長沼の年譜や伝記的事項については、関雄一『草の葉の人―長沼重隆評伝』（ブルージャケットプレス、2019）を参照。

する。力行会とは 1897（明治 30）年にプロテスタントの牧師、島貫兵太夫が開設した組織で、苦学生の支援やアメリカを主とする海外渡航のための教育や援助を行っていた[7]。1908 年 3 月に日本郵船の貨客船丹後丸で、シアトルを経てサンフランシスコに到着する。昼間は住み込みで家事労働に従事し、夜間には学校に通うという、いわゆるスクールボーイをしながら、グラマースクール、ジュニアハイスクール、バークレー高校などの学校に通い、その間『日米』に俳句、短歌、詩などを積極的に寄稿する。外国文学や劇についての関心が高く、作家オスカー・ワイルドについて、またフランスの女優サラ・ベルナールについての評論も書いている。1914（大正 3）年、24 歳のときには日米新聞社の客員文芸記者となり、劇評を担当した。この時期に翁、明石順三、清水暉吉、阿部四郎、新妻莞らの文芸人たちと交流し、移民地文芸論を議論し合った。

長沼が民衆詩派の詩人と最初に接触するのが、1916（大正 5）年、26 歳の時である[8]。富田砕花が友人の新妻莞（当時テキサスのフリスコ市にいた）にトローベルの著書『共存の歌』『オプテモス』の購入を依頼し、その新妻が、友人であった長沼に依頼をしたのだった。新妻についてもまだ不明な点が多いが、1894（明治 27）年に生まれ、1915（大正 4）年頃に渡米し『日米』で記者をしていたようである。1919（大正 8）年頃に帰国し、大正日日新聞の創刊にも携わったようだ[9]。購入の手配をしたうち、『オプテモス』だけ入手できたので、長沼はそれを富田に送ったという。おそらくこの時に富田の存在を知ったと考えられる[10]。これを契機としてか、翌年にはトローベル著『オプテモス』『キャムデンのウォルト・ホイットマンと共に』を図書館で借りて熟読し、長沼はトローベルの著作に魅せられる。さらにはトローベルに感銘を受けて、1918（大正 7）年、トローベルに会うためにニューヨーク行きを決意し、実行のための計画を立てる。資金が必要なためサンフランシスコを離れ、南カリフォルニアの帝国平原の農園で労働に従事する。この頃、トローベルに宛てた手紙の返信が届き、その中に日本に居住する福田正夫という人物も自分に手紙を送ってくれるとの旨が記されており、そこで長沼は福田の名を初めて知った[11]。

1919 年、念願だったニューヨークに到着し、トローベルを訪問する。福田の住所をトローベルから聞いて福田と文通を開始した。井上康文、富田とも文通し、百田宗治からも詩集を送ってもらうなど、福田を通して民衆派詩人たちを知った。また 5 月 31 日に、ニューヨークのホテル・プレヴォートで「ホイットマン生誕百年祭記念講演会」が開催された。トローベルも出席し、長沼はトローベルに請われ「東洋におけるホイットマンの影響」という題で講演したという。長沼のホイットマンについての研究をトローベルが評価していたことが窺われる。その後、長沼は 9 月から日本郵船ニューヨーク支店に勤務した。

---

[7] 島貫兵太夫『力行会とは何ぞや』（警醒社、1911）；稲垣真実『兵役を拒否した日本人』（岩波書店、1972）、2。
[8] 長沼と民衆詩派、トローベルとの関係は特に以下が詳しい。関、『草の葉の人』、137-148。
[9] 新妻の略歴については調査中である。新妻莞『新聞人・鳥居素川』（朝日新聞社、1969）に略歴が記載されているが、年号など記述内容が正確かどうかは疑問の余地がある。関、『草の葉の人』内の叙述と照らし合わせてみた結果、1915 年頃に渡米、1919 年頃に帰国しただろうと推測される。
[10] 関、『草の葉の人』、87。
[11] 長沼重隆「福田正夫とトローベル」福田正夫詩の会、『福田正夫―追想と資料』、15-16。

長沼はトローベルの文学を介して、野口とも出会っている。1920 年 1 月、長沼はニューヨークで野口と初めて会った。ここで野口についても詳述しておこう。翁、長沼らがアメリカに向かっていくのとは逆に、アメリカで詩人としての地位を確立した野口は、1904（明治 37）年 29 歳のとき、日露戦争の報道を目的とした日本通信員として、日本に帰国する。翌年には慶応義塾の文学部英文科主任教授に就任し、1909（明治 42）年には、『巡礼』（*The Pilgrimage*, 1909）を刊行し、欧米の読者に向けて日本詩歌の紹介を行っている。その間、前妻のレオニー・ギルモアと息子のイサム・ノグチが来日する一方、女中の武田まつ子と結婚して長女も生まれるなど、私生活においても世間の注目を浴びていた。日本帰国後には積極的に日本の詩歌や文学、芸術論の執筆に専念していたようだが、それと同時にトローベルについての論稿もたびたび発表している。堀によれば、トローベルが日本で受容されるのに一役買っているのが、野口だったようである。彼は 1915（大正 4）年に「ホーレス・トラウベル」(『読売新聞』1915 年 7 月)、1917（大正 6）年「民主主義の人トラウベル」(『文章世界』1917 年 11 月)、1920 年には『トラウベル詩集』(1920）を出版している。また野口はトローベルと親しい友人関係にあり、トローベルも野口の詩を高く評価していたようである。そして、トローベルと野口を結び付けたのは、野口の詩の創作に多大な影響を与えたと考えられるホイットマンの文学であった[12]。野口とホイットマン、トローベルとの関連については、多数の先行研究も存在し、別稿に譲らなければならない大きなテーマであるため、ここで論じることはできないが、野口を介してトローベルが日本に紹介され、またトローベルと野口の交流を促したものが、ホイットマン文学という点は、民衆詩派たちとトローベル、ホイットマンとの関連と同様に、興味深い点である。いかにホイットマンの文学が大正から昭和初期にかけての日本の文壇に影響を与えていたかが窺える[13]。

さらに、長沼がニューヨークで野口と初めて会ったときのことだと考えられるが、長沼が訳したトローベルの論文と詩編、そして長沼の小論を加えた論集『トラウベル論集』を、長沼は野口に依頼して日本へ持ち帰ってもらった。その後、野口、福田、井上、阿部の尽力で新潮社が出版を引き受けてくれたが、同社の都合で出版が実現されなかったという。その後も長沼は積極的に、ホイットマンやトローベルについての論稿を発表していく。

翁の場合はどうだろうか。翁については、在米時代よりも日本帰国後に民衆詩派とのつながりができ、交流を深めていったようである[14]。翁は 1888（明治 21）年に富山県立山町六郎谷に、漢方医の父源指と母フシイの次男として生まれる。1905（明治 38）年 17 歳のとき、旧制富山中学校（現富山高等学校）で寄宿舎の舎監に対し同級生 7 人と悪戯をしかけたため、放校処分となる。当時、富山においては最も高い評価を得ていた富山中学校に晴れて進学し、将来の道が開けていたかと思われた矢先

[12] 堀によればトローベルから野口に宛てた書簡には、両者の親密な関係が窺え、ホイットマンについて執筆したいなら自分のもとへ遊びに来るように、ともに語り合おうという内容が記されているという。堀、『「二重国籍」詩人　野口米次郎』、481。

[13] ホイットマン文学の日本での受容に関して代表的な研究は、亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』（研究社、1970）であろう。

[14] 翁の年譜や伝記的事項については、逸見久美・須田満編『翁久允年譜』第三版（翁久允財団、2020）;『翁久允全集（全 10 巻)』（翁久允全集刊行会、1972-1974）を参照。

の大きな挫折であっただろう。父の取り計らいで、縁戚である女性活動家、富山県滑川出身の中川幸子が経営する私学三省学舎で学ぶため、翁は上京する。そこで彼は多くの富山出身の学生たちと交流し、当時の青年たちの間にあった渡米熱に触れ、アメリカへの憧れを抱くようになる。そして 1907（明治 40）年、加賀丸に乗船し、シアトルに到着する。語学研修を目的として渡米したものの、生計を立てていくためには、苺摘みやエレベーター・ボーイ、家事労働など移民労働者が行う典型的な仕事に従事せざるを得なかった。労働にいそしむ中、シアトルにおける日本人差別の現状に耐え兼ねて、翌年にはシアトルの東側に位置する軍港の街ブレマートンへ移る。スクールボーイとなって家事労働の傍ら、語学の勉強のために学校へ通い始めた。そして故郷への懐かしさや寂しさを紛らわすために、小説を書いてシアトルの『旭新聞』などに積極的に投稿していく。その後、一時帰国し日本で伴侶を得、アメリカに戻ってからは、安定した経済的基盤を得るために文筆を諦めてシアトルの古屋商会に勤務した。しかし、やはり自分に適した道は文筆業だと自覚し、1914（大正 3）年には知人から依頼された雑誌『太平楽』の編集を行うためにスタクトンへ移る。翌年、サクラメントの『桜府日報』スタクトン支社主任となり、さらには『日米』主筆山中曲江より長編小説の連載を依頼され、翁は『悪の日影』（全 99 回）を連載する。この作品は、シアトル周辺にいた青年文士たちの異国での苦悩、将来への不安、酌婦との恋愛事情などを赤裸々に描くものだったため、サンフランシスコを周辺とする若い文芸人たちの間で大きな反響を呼んだ。そして、移民地文芸とは何かという議論が紙面上で繰り広げられていくのであった。その後 1918（大正 7）年、翁は『日米』オークランド支社主任となり、文芸欄を担当して『日米』を発表の場とする移民地文芸の動きを牽引していく存在となった。1923（大正 12）年には初の短編小説集『移植樹』（1923）を出版する。

このように在米日本人社会の文学活動の中心となっていった翁は、1924（大正 13）年、36 歳のとき、父の病状の悪化を聞いて妻と長男とともに帰国する。帰国の船上、妻が懐妊していることもわかり、そのまま日本に居住することとし、1924 年には東京朝日新聞社に入社した。そして 1926（大正 15）年 38 歳のときには、東京朝日大朝出版編輯部長として『週刊朝日』の編集を担当する。これにより、日本の文壇で活躍する作家たちと翁の交流がより活発になり、さらには民衆詩派たちとのつながりが生まれてくるのである。1924 年の 5 月頃と考えられるが、『週刊朝日』の編集を任された翁は、助手として働いてくれる人材を探していた。そこで思い浮かんだのが、アメリカ時代、サンフランシスコの『日米』で、ともに文学活動をしていた清水暉吉である。彼は翁よりも数年早く帰国していたのだった。翁は清水を編集作業のための助手とした。その清水のもとへ福田が訪ねてきたことで翁は福田を知ったのである[15]。

これを機に翁は福田らと文学を通じて交流していく。1927（昭和 2）年 3 月に「日本文壇の印象（全 6 回）」（『日米』1927 年 3 月 13 日～3 月 18 日）を寄稿するが、その第 5 回「日本文壇の印象（5）」（『日米』1927 年 3 月 17 日）で、福田正夫について詳述している。また福田からも『主観』への作品掲載を依頼されており、同年 5 月からアメリカ移民の生活を題材とした小説『道なき道』を『主観』

[15] 翁や清水の回想から、清水が帰国したのはおそらく 1922 年と考えられる。逸見・須田、『翁久允年譜』、18；『翁久允全集 4』（翁久允全集刊行会、1972）、204-205.

に連載していく。

３．民衆詩派とのつながり―作品、著作

次に民衆詩派とのつながりについて、作品や著作から探ってみたい。先述したように、翁は随想「日本文壇の印象（5)」を日本から『日米』に送り、そこで福田正夫の印象について述べている。ここでは、叙情詩人としての福田は近年では『嘆き孔雀』『死の子守歌』の作品を著し、それらが映画化されたことで、日本国内で著名となったと評している。さらには、詩人というより小説家として立とうとして、『光の翼』を書き始めていると福田の近況を紹介する。また、福田を中心として雑誌『主観』が発行され、在米日本人社会で活躍していた文芸人たち長沼、阿部、清水などが同人となっていることも記す。翁は『週刊朝日』の編集を担当しているために、同人となることはできないが、同人なみに彼らのもとに出入りしているとし、彼らとの交流を記述した。この全 6 回の随想「日本文壇の印象」は翁による日本作家たちの人物評といった類の連載で、文学的観点からの批評というより、翁が交流している作家たちの印象をエッセイ風に紹介したものである。「日本文壇の印象」の他にも、翁が日本の文壇について紹介した同時期の記事としては、「日本文壇の諸作家の印象」（『日米』1927 年 1 月 1 日）がある。ここでは、菊池寛、三上於菟吉、徳田秋声、鈴木三重吉、田山花袋を扱い、各作家についてその人柄や読者の興味を誘うような逸話を述べている。「日本文壇の印象」で取り上げられた作家は、福田の他に菊池寛、近松秋江、生方敏郎、北原白秋、大泉黒石である。いずれも一般読者にとって読み易い内容ではあるが、同時にそこには翁自身のアメリカ時代の思い出や人脈との関連、日本人・日本文化とはどういうものかという観点も見受けられる。翁が福田らの文学的傾向に対してどう考えていたのかは、さらに調査する必要があるが、数多くいる日本文壇の著名な作家の中で、福田を取り上げていることは、翁の福田への関心、また福田を日本文壇において注目すべき存在であると翁が認識していることを示しているだろう。

他に翁が書いた記事で重要なものは、「ホヰツトマン詩集をおくるまで―東京にて（全 2 回)」（『日米』1927 年 10 月 7 日、8 日）である。これらの記事では、翁が『ホイットマン詩集』の邦訳本を『日米』の社員に送付する経緯が描かれている。随想風の軽い筆致の文章ではあるが、『ホイットマン詩集』をめぐって、日本にいる翁と『日米』の記者とのやり取り、そこから在米日本人社会におけるホイットマン認識を垣間見ることができる。まず第 1 回では、大阪朝日新聞の主幹原田棟一郎（とういちろう）から翁が手紙を渡されたこと、それは『日米』記者の大石繁治の手紙であり、そこには『ホイットマン詩集』の邦訳本を朝日新聞社で集めて送ってほしいとう旨が記載してあった。『ホイットマン詩集』の邦訳本はいくつもあり、その全体の書誌情報についてはまだ調査中であるが、1920 年に白鳥省吾が『ホイットマン詩集』（1920）を、1921 年に有島武郎が『ホヰットマン詩集　第一輯』を、また 1922 年に富田も『草の葉　ホヰットマン詩集』（全 2 冊）を刊行していた。高村光太郎については詩集ではなく、『ホイットマン自選日記』（1921）を翻訳出版している[16]。そこで、有島武郎の息子生馬、白鳥、富田、高

[16] 国立国会図書館や国内の大学所蔵によると、白鳥省吾訳『ホイツトマン詩集』（新潮社、1920）；有島武郎訳『ホヰットマン詩集　第一輯』（叢文閣、1921）；有島武郎訳『ホイットマン詩集　第一・二輯』（叢文閣、

村にそれぞれ邦訳本を送ってくれないかと翁は依頼した。ところが白鳥と高村からしか送ってこない。そこで清水暉吉に頼んで古本屋で探してもらい、なんとか上、下巻がそろったので、それらを『日米』社宛てに送ったという。『日米』の富田清満宛てに手紙も書いた。続く第2回では次のように記載してある。書籍が無事に到着したか、しばらく不明であり不安であったが、一カ月後に『ホイットマン詩集』は『日米』社に無事到着していることがわかった。その後、『日米』に大石による「ホヰツトマンの家を訪ふて」という記事が出た。その記事には、これらの詩集（邦訳本）がホイットマンの記念館におさめられることになったと記されており、翁は安堵したという。

この記事に関連し、大石の記事も発見することができた。それは大石繁治「ホヰツトマンの家を訪ひて―邦訳詩を請はるゝの記（全6回）」（『日米』1927年8月13日～8月18日）である。カムデンのホイットマン家を訪れた大石がホイットマンの遺族たちと交わした会話、大石の感動などが記されている。また第1回目には、翁から書籍を送ってもらったその経緯も記載してある。この他にも同時期に、ホイットマンに関連する記事が『日米』に掲載されており、例えば「民衆詩人の家―市有として保存」（『日米』1923年11月19日）がある。民衆詩派と『日米』を中心とする文芸人たちとの交流やその意義を明らかにするためには、『日米』でホイットマンがどのように報じられていたかを調査し、在米日本人社会においてホイットマンがどのように認識され評価されていたのかなども把握する必要があるだろう。

翁の福田に対する文学的評価については、まだ明確にはなっていないが、福田が翁をどう捉えていたかについては、以下の文章からその一端を知ることができる。1928年に発表された、福田正夫「二つの著書」[17]である。ここでは福田は翁の小説『道なき道』の刊行に際し、他の日本人作家が出版したアメリカ関連の作品と比較しながら、翁の作品を論じている。福田によれば、永井荷風の『あめりか物語』は紀行小説として読者を驚かせ、最近は佐々木指月および谷譲次がアメリカ随筆を刊行して読者たちの興味をつないでくれたという。そして翁の『道なき道』が刊行されたが、この作品は単に興味深い作品というより、真実の一路を示すものであると評している。作品は「小説として一個の人間としての道を描きながら、その横にアメリカ生活を織り込んでいる。」「幾つかの魂の苦しみをとほして、アメリカ生活の本質的なものを示してゐる。」と高く評価しているのである。この福田の文章からは、当時の日本の読者たちがアメリカへの高い関心を持っており、永井、佐々木、谷の作品のその延長線上に翁の作品があると位置づけていることがわかる。しかも、翁の作品にみられる、アメリカ生活の現実味を表した描写に着目し、これまでの作品よりも、在米日本人たちの真実のアメリカ生活が詳細に描かれていると福田は評価しているのである。

福田がなぜ翁の作品を高く評価しているのか。その点に関してもさらなる考察が必要であるが、方向性として必要な観点は、民衆詩派の福田の作品と、翁の作品に共通する労働者の生活への関心という点であろう。福田は数多くの詩において、理解の困難な技巧的な詩ではなく、庶民にとっても理解

1921）；富田砕花訳『草の葉　ホヰットマン詩集』（全2冊）（大鎧閣、1922）；高村光太郎訳『ホイットマン自選日記』（中正社、1921）などがある。

[17] 福田正夫「二つの著書」『主観』9月号3巻8号、1928（昭和3）年9月1日、2-3。

しやすい、市井の人々や労働者の生活を詠った詩の創作に専念してきた。それは民主主義というアメリカから輸入された思想にもとづくものでもあり、だからこそ大正デモクラシーの機運とともに、福田ら民衆詩派の作品は注目されるようになった。そしてデモクラシーの観点から、福田たちはアメリカの民衆たちの生きざまを詠ったホイットマンを信望したのだった。福田の労働者の生活に対する関心と、翁が移民地文芸として描こうとしてきた在米日本人たちの現実生活は、文学的関心事として共鳴するものであったのだろう。だからこそ、福田は翁に『主観』への作品掲載を依頼し、両者の交流が深まっていったものと考えられる。

４．民衆詩派と在米日本人作家の関わり―どう評価するか

それでは以上のようにまとめてきた民衆詩派と在米日本人作家との関わりを、先行研究を踏まえてどのように評価したら良いのであろうか。民衆詩派に関する先行研究は多々あるが、その中で本稿の視点と関連する重要なものを取り上げてみよう。まずは亀井俊介『近代文学におけるホイットマンの運命』の「第４章　大正文学の世界とホイットマン」である。亀井は民衆派詩人たちの盛衰は、いわゆる大正デモクラシーの盛衰と完全に一致していたことをまず指摘する。さらに民衆詩派の詩人たちは大正テモクラシーの機運に見合う新たな詩表現を求めなければならなかったが、それを日本の詩の中に見出すことができず、外国の詩人の中に手本を見出す必要があったという。そして彼らが見出したのがホイットマンやカーペンター、トローベルなどであったと述べている[18]。しかし、亀井は民衆詩派らの弱点を指摘し、「彼ら全体をひっくるめて、民衆派は Whitman の主張の一面をとらえ、よく利用はしたが、結局その魂をつかむことができなかった。また、Whitman の詩法の外面的な模倣はしたが、魂の表現としての幅や深みを吸収することはできなかった。（略）そして何より重要なことは、彼らの Whitman の学び方の浅さが彼ら自身の自覚の浅さと結びついていた。」[19]とし、ホイットマンの文学を支える神髄のようなものを、彼らが十分に理解して自分たちの作品に反映させることができなかったという弱さを説明している。

民衆詩派の評価の定説としては、信時哲郎執筆「民衆詩派」『現代詩大事典』（2008）[20]を参照する必要があるだろう。ここでは、以下のように記載されている。

> 彼ら［民衆詩派―筆者］の主張するところは、おおまかにいえば民衆に芸術を近づけることであり、労働者や農民の生活や心情に即した詩をつくることであった。これは白樺派による人道主義や本間久雄の論文をきっかけに起こった民衆芸術論争が下地となった詩壇におけるデモクラシー運動と解することができるが、その民衆観は空想的で、社会改革といった方向にまで推し進められることはなかった。この論争［白秋、白鳥、福田の論争―筆者］の影響もあって民衆詩派の芸術的価値は今日まで低いままなのだとも言われている。（中略）し

[18] 亀井、『近代文学におけるホイットマンの運命』、480-481。
[19] 同上、515。
[20] 安藤元雄、大岡信、中村稔監修『現代詩大事典』（三省堂、2008）、646-647。

かし、彼らの運動が近代詩史にもたらしたものが大きかったのも事実で、旧世代の詩的言語ともいうべき文語を廃し、新しい時代にふさわしい平易な口語による詩を定着させたこと、また、プロレタリア文学運動へ繋がっていく精神を育んだこと等は評価されなくてはならない[21]。

このように記され、亀井の論と同様に作品の深まりについては留保されている。

この記述を受けて、勝原晴希「民衆詩派の再検討のために―大正デモクラシー、トクヴィル、ホイットマン」[22]では、芸術的価値が低いのにも関わらず、詩壇で重んじられていたこと、そして近代詩に大きな貢献をもたらすことになったのはなぜか、これらの疑問については今日まだ解明されていないとし、その疑問を解くための鍵としてアメリカにおけるデモクラシーの概念について考察している。

近年では堀まどかが『「二重国籍」詩人　野口米次郎』（2012）の「第 10 章　大正期詩壇における野口の位置（b）民衆詩派・野口・トラウベル」[23]において、「それ［民衆詩派―筆者］は、デモクラシーの機運の中、英米の民主主義的な思想傾向を持ち、視野やモチーフを社会的・庶民的に拡大して、労働者や農民の労働、小市民的生活などを詠った詩壇の一潮流のことである。」[24]と定義し、「野口が大きく関わったトラウベルの受容は、大正期から昭和期にかけて、民衆詩派の詩人たちが社会主義的な傾向へと向かう経緯を考える際に重要な鍵となる。」[25]と述べ、民衆詩派の評価に野口米次郎研究からの新たな視点を提示している。また関雄一『草の葉の人―長沼重隆評伝』（2019）は、長沼の生涯を数多くの第一次資料をもとに詳細に記述する中で、民衆詩派の評価を試みている。特に「第 12 章　誕生は私達に豊穣と多くの変種をもたらした―福田正夫ら民衆派詩人と交流すること」においては、「トロ　ーベルを介した長沼と福田正夫の邂逅は、大正から昭和初期にかけて燃え上がった民衆詩運動にとって見過ごせないモーメントの一つであったろう。」[26]とし、続けて「近代詩から現代詩へ変容していく流れに投げ込まれた『詩を生きる、詩はそのもの』という生き方の詩想の萌芽と認識できよう。まさに二つの詩魂の衝突であった。長沼にとってもあの若書きの『現代詩論』から時を経て、美から生への失踪の時を迎えていたと言ってよいと思う。」[27]と分析している。

これらのような新しい観点もあるが、民衆詩派の評価については、芸術性の低さ、ホイットマンの詩とデモクラシー概念への理解の浅さが指摘されてきた。その一方で芸術性の低さにも関わらず詩壇への貢献度は大きいと認識されていることも確かである。それはいったいなぜなのだろうか。このなぜかという問いに答えることは現時点では困難である。しかし、民衆詩派の日本文壇への貢献という観点から考えてみると、在米日本人作家たちとの文学的交流によって、日本文壇にもたらされた新た

[21] 同上。
[22]勝原晴希「民衆詩派の再検討のために―大正デモクラシー、トクヴィル、ホイットマン」『駒沢国文 53』2016 年 2 月、179-195。
[23] 堀、『「二重国籍」詩人　野口米次郎』、254-287。
[24] 同上、257。
[25] 同上、258。
[26] 関、『草の葉の人』、139。
[27] 同上。

な文学的特徴や視点があったのではないかと考えている。日本文壇で注目されていた民衆詩派の文芸誌に、翁ら在米経験者の文芸人たちの作品が掲載されたという点は、彼らの作品が日本文壇で知られるための足がかりとなり、特に翁について言えば、アメリカに居住する日本人が抱える問題や、彼らの生活という、それまで日本文壇では着目されることのなかった問題を日本の作家および読者に知らせることとなった。そして、翁の作品はこれまでの日本文壇にはなかった作風だという声が、『道なき道』が刊行された際に文壇から挙げられている[28]。また長沼については、アメリカにおいて培ったホイットマン、トローベルへの高い理解と学術的な知識を、福田が主宰する雑誌『主観』『生命』において発表したが、それはまた民衆詩派によるホイットマン、トローベルの理解を補完する役割も担い、日本の文壇におけるホイットマンとトローベルの作品、作家理解と受容を少なからず促進したとも推察される。

最後に、もう一点、在米日本人作家と民衆詩派とのつながりの観点が、日系アメリカ文学史の再考を促すという点で重要な事項を紹介しておきたい。日系アメリカ文学の歴史において、1920 年代以降の日本語文学を牽引していく中心的な存在に、呼び寄せ一世の詩人、加川文一（1904-1981）がいる[29]。彼は 1919（大正 8）年 15 歳のときに、先に移民として渡米していた父に呼び寄せられ、カリフォルニア州パロアルト周辺に居住した。彼は英詩人アイヴァ・ウィンターズに師事し、1930（昭和 5）年、英詩集『秘められた炎』（*Hidden Flame*, 1930）を出版し、野口米次郎の名前が引き合いに出されて評価されるなど、在米日本人社会において注目を集めた存在であった。この詩集出版後は、日本語で詩を書くことに専念していき、太平洋戦争が勃発して日系人たちが強制収容所に送られた際にも、収容所内で文芸誌『鉄柵』発行の中心人物となり、さらに戦後にもロサンゼルスを中心として集まった日系人たちの日本語文芸雑誌『南加文芸』のリーダー的存在となった。加川はまだ渡米して間もない時期にも詩を創作しているようだが、その詩が雑誌『主観』に多数掲載されているのである。これまで加川の文学観や詩の特徴、どのような影響を他の作家や作品から受けているのかという点は、彼自身がそうした内容について語っていることがほとんど見受けられないという資料の制約もあり、なかなか掴みにくい問題であった。ところが、加川が雑誌『主観』に作品を寄せていたということは、加川における民衆詩派の影響も考察すべき観点として見えてくる。また、筆者が取り組んできた日系アメリカ文学史のこれまでの研究においては、翁が 1924（大正 13）年に『日米』を去った後、一世世代による移民地文芸の動きは、1920 年代以後の加川らを中心とする日本語文学へとどのように受け継がれていったのかという問題が、明確にできないでいた。その点に関しても、翁や長沼、清水など 1910 年代半ばから移民地文芸論を議論していた一世世代の文芸人とともに、在米日本人社会の文学活動において一世世代の跡を継いでいく加川が『主観』に作品を寄稿していたという事実は、彼ら

[28] 例えば松岡譲「翁久允氏の新著『道なき道』を読む（上）」には「在米同胞の生活の実相をひらいて、まだ吾々の知らなかつた取材の領土をひろげた点に於て丈けでも、充分氏の労を多としていゝであらう。」と述べている。1928 年の記事を集めた翁のスクラップブック（翁久允財団所蔵）にそうした書評記事が多く見られる。
[29] 加川については、水野真理子「日系アメリカ人の文学活動の歴史的変遷―1880 年代から 1980 年代にかけて」博士論文、京都大学大学院人間環境学研究科、2012 年 1 月の「第 3 章　加川文一の 1930 年代」を参照されたい。

の文学活動の連続性について新たな論を提示できるように思われる。

５．おわりに

以上見てきたように、在米日本人作家と民衆詩派との交友関係やつながりについて整理し、その概要や重要な観点を示した。これらを踏まえてさらに進めていくべき研究の方向性としては、両者の関連性について、第一に文学的親和性、作品の特徴、文芸観に焦点を当てて考察することである。その際には、彼らをつなぐ存在であったホイットマン、トローベル、そして野口との関連性について、交流関係の側面に加え、作品に見られる文学観などから明らかにしていく必要があるだろう。第二に民衆詩派と在米日本人作家たちとのつながりによって、もたらされたものが何であるかを明確にすることである。まずは、日系アメリカ文学の流れにおいて、翁、長沼、加川の作品や文学活動を、民衆詩派とのつながりという観点から、再評価することが必要である。こうした作業によって、日系アメリカ人の文学活動をよりいっそう立体的に描写することができるだろう。そして、初期日系アメリカ文学と民衆詩派の関連性を解明することによって、日本文学史における民衆詩派の再考と再評価にもつなげていければと思っている。

本稿は、JSPS 科研費 20K00412 の助成を受けたものである。

水野真理子
教養教育院